

## 第2回彦根市スポーツ推進計画策定委員会 会議録要旨

【日 時】平成28年11月7日（月）10:00～12:00

【場 所】彦根市民会館 第3会議室

【出席者】別紙名簿のとおり

### 1. あいさつ

[委員長]

良い天候で、まさにスポーツ等に最適な天候である。一方、残念だが、気候変動等で春と秋のシーズンが少なくなってきた。文化として健康体力づくり、秋はイベントがたくさん準備されており、地域の間関係づくり、まちづくりにも役立ててほしい。

イベント等への市民の参加状況も気になる場所である。彦根のスポーツがにぎやかになり、人間関係づくり、まちづくりが盛んになる施策について検討してもらいたい。知恵を出して、よいものができるよう力添えいただきたい。

### 2. 議題

[委員長]

近年、スポーツの幅が広がってきている。様々な意見をいただきながら、策定委員会を進行したい。前回、市総合計画等スポーツ関連の施策の整理と、障害者スポーツの状況がわかる資料の提示を求めたので、資料の説明をお願いする。

[委員長]

障害者スポーツ大会の参加状況について、例えば、シティマラソンに車いすの人や視覚障害の方等の参加もあるのではないかと。元気フェスタも含め、ハンディをもった方が参加できる場面は幅広くあると考えられる。

[事務局]

シティマラソンでは、車いす部門も設けてあるが、競技用車いすでの参加はなく、毎年一般部門に競技用でない車いすで参加される方はある。視覚障害の方の参加は毎年あると思うが、詳細の人数は持ち合わせていない。

[委員長]

そのような取組を活かしていくことができるのではないかと。元気フェスタでの工夫はどうか。

[事務局]

今年度の取組として、フライングディスクとジャベリックスローの体験を行った。参加者は障害者限定というわけではなく、広く競技の紹介ができた。

[委員長]

ボランティア活動等、世話役の活動についてはどうか。

[委員]

元気フェスタの事前の打ち合わせについて、関係者の協議が不足していると感じた。様々な団体同士の事前の打ち合わせが必要である。

[委員長]

全国障害者スポーツ大会の参加が少ないが、予選があるので少なくなっているのか。

[委員]

競技ごとに予選が開催される。一定レベルの記録で候補選手に選ばれることになる。前年度の記録をもとに参加選手が選ばれ、4月に記録会を行い、5月に選考するような流れ。滋賀県として、各種目に参加人数の割り当て枠があり、その人数が選出される。

今年は9月に県大会があり、参加申請書等に全国大会への参加の意思を確認する欄があり、チェックすれば記録が選考対象となる。強化選手に選ばれれば、月1~2回で彦根総合運動場や希望が丘文化公園で練習がある。

今年度の全国障害者スポーツ大会に出場した1名は私自身。県の規定として、3年連続出場の選手は翌年エントリーできないことになっているため、次年度は参加できない。改めて、その翌年にはチャレンジできることになる。

参加枠として、身体障害と知的障害に分かれる。滋賀県の陸上競技の身体障害者の枠は4名、知的障害者は6名。水泳はそれぞれ2名ずつ、フライングディスク2名、4名、ボーリングは知的障害者のみ2名。大会ごとに選手の参加枠について、開催県から連絡を受け、その数を選考することになる。開催予算の制限もあり、ある程度数も絞られる。

今年度、参加してきたが、選手層が若返ってきていると感じた。私は現在66歳で第2部での参加となった。砲丸投げが4位、ジャベリックスローでは自己ベストを出すことができ、3位でメダルを獲得できた。

知的障害の人について、養護学校に通っている人は学校にクラブがあることが多く、陸上競技についてもそういった状況で、指導者もいる。

一方、身体障害の人について、私が知る限り、若いメンバーで競技を行っている人がいない。選手層の開拓が必要だと感じる。滋賀県全体を見渡しても身体障害の人で競技を行っている人は少ないのではないかと感じる。知的障害の人は競技者も多く、競争が厳しい。

今後、世代交代等を進めていくことになり、5~6年の計画で、今の中学生あたりを開拓していく必要があるのではないかと感じる。

[委員長]

競技力が上がってきているとの報告があった。また、障害者スポーツについては、学校での活動が競技を支えている印象を受けた。社会制度としても学校に委ねられている面があり、参加できるシステムをどうしていくのが課題ではないかと感じる。

[委員]

競技をする場所がないと感じている。また、専門的な指導者の存在が重要。更生会で指導しているが、活動場所が少ない。

[委員長]

施設の充実と指導者、スタッフ人材育成の指摘があった。

[委員]

どの学区でこういったスポーツが取り組まれているのか、地域からのアピールがない。私はバドミントンをやっていて、参加してみたいが、どこに聞きに行けばよいかわからない。市の広報等に情報が掲載されるとよいのではないかと感じる。地域でのスポーツ交流を促すのであれば、情報提供も必要ではないかと感じる。

[委員]

元気フェスタに出ているが、たくさんのチラシを発行して、ようやく人が集まるのが現状であり、広報の重要性を感じる。インターネットを活用する等、他都市から転入してきた人にもわかってもらえるような情報提供が必要。さらに、様々な競技が市内各地で取り組まれていることについても情報提供が必要ではないか。

[委員長]

地域には素晴らしい能力を持った人がいるかもしれない。指導者についても、地域で頑張れる人がどこにアプローチすればよいのかわかるような情報提供が必要ではないか。

[委員]

転勤で彦根市にやって来た人等に対して「ウェルカム」になっている印象を受けない。彦根では人に聞いてもわからないことが多い。近江八幡市等では転入者に対して案内等があると聞く。

[委員]

例えば人材バンクを立ち上げ、ボランティア意向、競技意向など、そこにアクセスすることで活動する仲間について知ることができるになれば、活動も活発になるのでは。

障害のある人に対しては、活動のバックアップが必要だと感じる。

市民が高齢化すればバックアップも薄くなるかもしれないため、検証することが必要。活動状況をみると、近隣地区、近接年代でまとまる傾向がみられる。形としては活動団体に入ることはできるが、「仲間」にはなれないという壁を感じることもあると聞く。何らかの仕組みがあってもよいのでは。

[副委員長]

計画各部署からの取組が整理されているが、一般的に行政組織内で横連携ができないこともあり、計画を立ててもうまくいかないことが多い。例えば、計画内に、あるいは計画策定のプロセスで連絡組織をつくってはどうか。国ではスポーツ庁がその役割を果たそうとしている。

[委員長]

計画について、1年か2年に1回程度は、努力目標の達成状況を提示してチェックすることも必要。全ての市民がチェックするとは限らないが、行政としては目標値を掲げることが重要。興味のある人は見ているので、計画策定をしっかりとしていく必要がある。

## (1) 市民等意識調査の結果について

[委員]

1年間で行ったスポーツについて、県の結果が例示されているが、他の資料についても県、国と比較できる資料がほしい。

各部署がスポーツ施策の推進に関して横の連携がないとの指摘があったが、利用者の立場に立てば、「連携する」との答えが出るはず。

[委員長]

市民の立場に立った計画推進が必要との指摘である。

アンケート結果について、市と県の比較をするには、調査項目が同じでなければならないのではないか。

[事務局]

今回の調査項目については、全てが県と同じ項目ではない。

[委員長]

可能な範囲で提示してもらいたい。

[委員]

結果に加え、10～20歳代のスポーツの実施状況等、あるいは男女別の実施状況等についても分析を加えてほしい。

[事務局]

今回、提示した資料は「速報」として出しており、クロス集計等、細かな分析については作業中である。

年代別のクロス集計を行っており、一部結果を紹介したい。問10のスポーツの実施頻度については、年齢層が高いほど実施頻度が高い傾向が見られるが、問19のスポーツの実施意向については、年齢層が低いほど回答率が高い傾向が見られる。つまり、若い世代の人は、スポーツの実施意向があるにも関わらず、実際にはスポーツができていないという現状があると考えられる。

[委員長]

アンケートの傾向も計画策定には重要な視点となる。

子どもの活動についても、今の時代を反映している。家の遊びや勉強も大事にしている傾向が見える。外で遊ぶ機会が少ないのかもしれない。どのように計画に反映していくのか、あるいはどう改善していくのか検討が必要ではないか。

[委員]

小学校の子どもの活動の場として、荒神山等の施設もあるが、身近な場所が少ない。公園は狭く、ボール遊びができないといったルールがあるため、どこで遊べばよいのか、といった声も聞く。身近に子どもだけで行くことができる遊び場がほしい。元気フェスタ等にも行きたいが、家族が忙しくて行けない子どももいる。子どもだけで行ける場所やイベントがほしい。

[委員長]

小学生が運動に慣れ親しむ機会が少ない。中学生は部活がある。外で遊ぶことができるのが公園だけでは、活動も限られる。また、公園等も不審者の関係もあり、危険が潜む。学校施設を開放しているが、市民が十分に活用できない現状があり、課題になっている。

[委員]

中学校の教師としての視点から申し上げますと、生徒は土日にも部活動をやっており、元気フェスタ等のイベントについて、学校でチラシを配っても部活の練習や大会に行くので参加することが難しく、「狭い」範囲の中で一生懸命、運動・スポーツに取り組んでいるのが現状ではないか。気軽に友達同士でスポーツに取り組む時間も取れていない。部活が終われば塾があり、部活を引退しても時間がない。また、運動の「二極化」もみられ、運動する生徒の運動能力は高まるが、していない生徒は全くしない。

学校施設について体育館やグラウンドが地域に開放されているが、土日も含め、毎日ほぼ埋まっている。

[委員長]

彦根市の中学校の部活動は盛んな方ではないか。中学校の体力テストはよい結果が出ていると感じている。

学校施設について、小中学校施設が夜間や土日に開放されている。中学校は部活動があり、開放は遠慮してもらっているのではないか。

高校の方の状況はどうなっているのか。

[副委員長]

「二極化」がさらに進んでいる。部活動に参加する生徒は減るが、参加している生徒は頑張っている。部活動を辞めた生徒、やっていない生徒は運動・スポーツはほとんどしていないのではないか。

[委員長]

「生きる」という面では、活動の幅が広がっているのかもしれないが、部活を続ける子が減少し、アルバイトで忙しくしているなどの課題があるのでは。そういった若者が子育て期に入っていくことになり、若い世代が運動する機会をつくっていくことが必要ではないか。

[委員]

女子生徒に関しては、さらに問題が深刻ではないか。高校の体育の授業にもしっかり参加していない生徒もいる。こういった子どもたちが母親になると危機になる、と学生に言ったことがある。仕事以外の社会生活に参加する体力を小学校から高校で身につけることが必要だと感じるほど、体力がないと感じたことがあった。

[委員]

市民意識調査について、回答者の半分以上が60歳代以上となっているが、人口比率としてそういう現状になっているのか。

[事務局]

高齢者の方が回答率が高くなっていると考えられる。

[委員]

自身の母もシニア健康教室に通っている。ヨガ等のメニューがあり、健康意識は高い方だと思うが、実際に意識調査を確認すると、50～80歳代で運動・スポーツを実施している市民が多いことに気づく。ウォーキング等を意識的に行っている人も多いと思われるが、大きな会場で開催するイベント等であれば、交通の足がないと参加しづらいのではないか。

そういった意味では、高齢者も身近な場で運動・スポーツの機会を欲しているのではないか。公民館等で体を動かしている人もおり、地域の身近な場所出張教室等をやってもらうことで、運動・スポーツの機会を設けてもらいたい。

[委員]

スポーツ推進委員では出前講座に取り組んでいる。PRが不足していると感じているのもっとPRしたい。今の仕組みでは、団体の単位で申し込みを受け付けて出向いているが、今後はもっと幅を広げたい。

[委員長]

運動・スポーツの実態は年齢で異なる面が多いのでは。分析を深めてもらいたい。

[委員]

小学生のスポーツ活動の主なフィールドはスポーツ少年団になるのか。彦根市ではどのような競技が取り組まれているのか。

[委員長]

子どもの数が減り、チームが組めないとも聞く。学区を越えてチームを組んだりしているようだ。

[委員]

学区によって力を入れている種目があるのか。亀山学区は子どもの数は少ないが、サッカーに頑張っている。また、同学区では女子もスポーツ少年団で活動しているのか。

[事務局]

数は少ないかもしれないが、女子もスポーツ少年団で活動していると聞いている。

[委員長]

指導者の熱意等で差異があるかもしれない。

[委員]

教員が指導をしているところもあり、転勤でそのスポーツができなくなったとも聞いた。

[委員]

スポーツ少年団は地域で活動されており、教師の異動と連動していないのでは。

[委員長]

中学校の部活動は子どもに与える影響が大きい。球技ではバスケットボールやバレーボールは指導はしてもらえるが、柔道等は専門性も高く、指導者がいないため、部活動が設けられない。子どもの数も減り、部活動を幅広く設定できなくなってきた。競技種目の絞り込みが必要になってきており、学校として幅広い競技種目に対応できなくなってきた。

[委員]

子どものアンケート結果から、小中学生ともに、他の種目もやってみたいとの回答もあった。

[委員]

スポーツはやってみなければわからない面もあり、体験する場が必要。

スポーツ少年団は健康と体力が目的だが、勝つことを目的に活動している地域もある。参加したいが、仲間に入れない例や他の地域のチームに入る子どももいると聞く。

[委員]

中学、高校でもスポーツを続けてもらって、レベルの高いところを目指してもらいたい。

[委員長]

競技スポーツも裾野を広げていくことが課題。自分の意識を満足させることと競技力を高めていくといった面もある。

[事務局]

スポーツ少年団では、野球、バレーボール、サッカー、卓球、剣道、バドミントン、ホッケー、柔道、少林寺拳法が取り組まれている。

[委員長]

多様な種目に取り組まれているが、バレーボール等はチームの数も減っており、中学の部活動もなくなりつつある。近年はサッカーが増えている。また、クラブチームもできている。

## (2) 計画の骨子案について

[委員長]

計画期間について、事務局から4年に1回の見直しを挟んだ8年間の原案が提示されているが、いかがか。

[事務局]

総合計画が上位計画となり、整合を図りたい。次回見直しの時期が、総合計画では31年度から取組が始まると考えられ、33年度に新しい計画になると考えているので、そのタイミングに合わせたい。

[委員長]

8年後は滋賀国体開催となり、タイミングとしてはよいのではないか。

[副委員長]

うまく考えてあると感じる。上位計画の関連や国体開催のタイミングも鑑み、形通りの5年間ではなく、4年サイクルで取り組んではどうか。

[委員長]

スポーツ推進計画は、4年サイクルの8年計画で進めていきたい。

[委員]

計画骨子について、行政側の視点が目立つ。位置付けることができるのかわからないが市民側の視点も必要では。

利用者側の立場として、例えば、スポーツ情報のためのアプリの開発等が考えられないか。スポーツをする場所がわかる情報、利用状況がわかる情報等があれば、市民も助かるのでは。情報発信を施策に入れてはどうか。

[委員長]

市民の立場で考えた情報提供に関する指摘があった。大項目で位置付けるべきなのか、今後考えていく必要がある。第3回策定委員会以降で事務局で案をまとめてもらいたい。

[委員]

大学企業等との連携で、企業で体育館が開放されているところもあるが、他にも使わせてもらえるような場所があるのでは。

競技スポーツに関連して、エリートスポーツ、高いレベルのスポーツで活躍する地元選手を応援する基金等がつかれないか。

スポーツを「みる」、「する」、「支える」の3つにアプローチしたい。子どもが見ている中では大人は汚い言葉を使わない。一方、大人が支えると子どもが頑張る。3つを関連させて、よい循環がつかれないか。

「彦根オリンピック」という訳でもないが、単に体を動かすだけでなく、健康、睡眠、栄養へのアプローチ、子どもの成長のための運動、競技の歴史へのアプローチ等、文化プログラム等も含め、元気フェスタ等で多面的に情報発信し、彦根のスポーツの価値を高めていくようなことができないか。

[委員長]

彦根には大学も高校もたくさんある。もっと連携できれば、よい動きにつながるのでは。企業もあるが、開放してもらうことが難しい。セキュリティ面等からの制約があるが、実の

連携を進めていくべきとの指摘である。

地元出身で頑張っている選手、例えば桐生選手等を応援するアイデアも出された。商工会議所も応援しているが、基金等で支えるアイデアが出された。

また、彦根のイベントをもっと価値あるものにすべきとの指摘もあった。マンネリ化しているのではとのことではないか。知恵を出して、市民の関心が高まる魅力あるものにすべき。

[委員]

国体を迎えるにあたり、スポーツに関わっていれば、ボランティアにも関わってもらえるのではないかと。滋賀県の指導者協議会に登録している人材も彦根にいるのではないかと。活発に行動してもらえれば仕組みもあり活用できるのでは。

[委員長]

アンケート結果にも、ボランティアの活動意向は高い数値が出ていた。うまく仕組みをつくっていかねば、市民の意思を活かすことができなくなる可能性もある。

[委員]

ライフステージ、ライフスタイルに応じたスポーツ活動の推進について、年代別で書いているが、子育て世代と高齢者がつながることで、子どもを見てもらうこともできる。個々の年代別だけでなく、年齢を通じた連携で、一緒にできるようなものがないか。

[委員]

考えてみると難しいが、成功例を探せばどうか。子育て期間の世代と高齢者の連携例等を探してみてもどうか。指導者不足であれば、得意な人に楽しんでもらえるような仕組みがあれば、手も挙げてもらえるのではないかと。双方向で問いかけて、市民から応えてもらえるようにしてはどうか。

例を示せば市民も動いてくれるのでは。企業活動でもよい例があれば紹介してもらいたい。

[委員長]

実践例に学ぶという指摘であった。

どういったスポーツをどの地域が取り組んでいるのかわからない点で、学校開放でどういった団体が活動しているのか、一覧表などはあるのか。

[事務局]

学校の体育館、武道場、グラウンド等の開放を行っており、計 24 箇所あるが、9 割を超す利用率となっている。どの団体が活動しているのか一覧表としてはない。

[委員長]

一覧表のようなものがほしい。サークル仲間で行っている団体もあるはずで、誰もが入れられるのか、壁があるのか、あるいは、友好的に仲間になっていくにはどうすべきなのかも考えていく必要があるのでは。

[事務局]

中学校の武道場の夜間開放は少し空いている。天井が低いため、剣道、柔道、なぎなたなどに活用されている。

照明の設置により、夜間も使えるグラウンドが 3 つあるが、去年から利用率が高くなっている。利用者としては、スポーツ少年団のサッカー、クラブチームのサッカー、企業のソフトボール等が挙げられる。グラウンドの夜間開放はまだ余裕があるので広報が必要だと感じている。

[委員長]

小学校の体力向上の目標等はあるのか。

[委員]

県下で10分間運動に取り組んでいるが、やることは各学校に任されている。サーキット運動に取り組んでいるところもある。

[委員長]

県からの指示で取り組むのではなく、彦根の実態をみて、市として立てている努力目標等はないか。

[委員]

市としての目標は、まだ立てていない。各校で結果を比較して取り組んでいる状況。

[委員長]

それぞれを評価し、努力目標が必要ではないか。

[委員]

体力テストの結果をもとに集計して、検討しているが、中学校2～3年生女子の持久力が低い状況にあり、3年生は部活動を引退して軒並み体力が落ちている。体育の授業で柔軟性を補う運動等に取り組んでいる

[委員長]

保健体育課としての考えはあるのか。

[事務局]

新体力テストの結果について、全国・県・市の数値を比較するが、各学校でも学年でも結果が異なる。中学校はPDCAサイクルが機能しており、小学校は年間行事とリンクさせ、子どもに応じた運動遊び等について、各校で分析して子どもに応じた運動を提供していくべきだと考える。

[委員長]

各学校に任せるのか、各学校の課題に応じて取り組んでいるということか。

[事務局]

元気フェスタで体力測定も実施していたが、小学生は正しく測定することが難しい状況も見られるので、中学校の先生が小学校に出向くといった交流ができればと考えている。

[委員長]

施策によって、行政がしっかり対応すべきこと、民の側で頑張ること等、考えて行くべき。情報を集め、発信することは、サービスとして重要。講座を設けてほしいといった要望も多い。どこが対応していくのかも検討していくべき。

[委員]

情報を共有することは重要。年代層でマッチする媒体が異なる。インターネットを使う人もいれば、活字の人もおり、使い分ける必要がある。SNS等を使った情報拡散も考えられ、ボランティア募集等も早く人が集まるかもしれない。やはり、わかりやすい、見やすいものが必要。

[委員]

知ることが大切。市民にPRしていくことも重要。中学生はボランティアを盛んにしており、

呼びかけて経験してもらおうのも大切。各種団体長に呼びかけて、市全体で動きをつくってほしい。

出前講座で、団体の方に呼び掛けてスポーツを気軽に楽しんでもらう取組を進めているが、どう広げていくのか模索中。

[委員長]

スーパーカロムは喜んでもらっているのではないかな。

[委員]

体験してもらった声を紹介するのも重要であると思う。

[委員]

アンケートの結果を見て、国体の認知度はまだまだだと実感した。各方面にアピールしていくことで、競技に関わっている人もボランティアに参加してもらえないかな。

国体にちなんで、各競技の体験ができるのでは。東近江市で陸上競技体験に取り組むと、先着40名の枠が2日で埋まる。なぎなた等は体験でも集まらない。親を巻き込んで、国体のアピール、子どもを集める教室等に取り組んでいけないかな。

[委員長]

保健体育課だけでは難しいので、PRの輪を広げていってほしい。

[委員]

情報は重要。どのように広げていくのが鍵。1回だけでなく、さらに広げていくことも考えるべき。

運動が好きな子どもは多いが、1割程度の割合で、自分から運動をしない子どもがいる。そういう子どもに、どう運動の楽しさを伝えるのか考えたい。

[委員長]

子どもの特性を生かしたメニューも必要だが、もっと運動に親しんでほしい意識もある。

[委員]

先日の元気フェスタに、県の体育協会や障害者スポーツ協会から3人程度来てもらって、競技見本をしてもらった。こういった団体や市の障害福祉課とも連携してもらいたい。また障害者福祉協会の施策やPRもあるので、見てもらいたい。お誘いのチラシ等も市内施設や学校等に配布されている。彦根市も参考になるのでは。

指導者、ボランティアの育成について、障害者スポーツでは年1回初級指導者研修を4日間受けてもらえば、指導者資格をもらうことができる。上級の資格は大阪に行かなければならないが。

ボランティアについては、指導者の元に協力員がおり、競技の協力をする制度もある。彦根市の障害者で登録されている人もおり、お手伝いいただくこともできるのでは。

[委員長]

パラリンピックもあり、障害のある人のスポーツ振興が盛んになりつつあるが、専用の施設等が必要なものもあり、壁が高いと感じる。指導者の育成について、昔、その競技をやっていただけでは指導者になれず、資格要件がある。指導者をどう育成し、開拓するのが課題。

[委員]

スポーツと彦根が一緒になってブランディングしていけないかな。サッカーを指導しているが、

金亀グラウンドであれば、城の近くでサッカーができることになる。彦根の資源を生かしたスポーツもあるのでは。ツーリズムまで行かずとも、彦根を知ることができる取組を進めてもらいたい。

言葉の使い方でもスポーツにも取り組んでもらいやすくなることもあるのではないか。小学生なら「ゲーム」というキーワード。スポーツではあるが、「ゲーム」という言葉でネーミングするだけで、やる気をもってもらえることもあるのでは。高齢者であれば、「健康づくり」等、年代ごとに反応してもらえる言葉があるのでは。

ゲームでもよいので、生涯楽しむことができるスポーツがあるのでは。年代に応じた言葉の使い方も考え、勝ち負けや自己ベストを出すことだけでなく、実際には体を動かすようにしていけないか。

[委員長]

魅力ある言葉で「彦根方式」のスポーツをつくってほしいという指摘である。

[委員]

めざす将来像の副題について、ひらがなが多く読みづらい。「こころ」「からだ」は漢字でよいのでは。

スポーツを推進している団体について、市の体育協会とスポーツ推進委員等、どう関係しているのかわからない。次回、そういった関係がわかるような資料があれば、市のスポーツの実態の理解の参考になる。

[委員長]

市のスポーツを担う推進団体がわかるような情報がほしいとの指摘である。また、ボランティアについても大事。

[委員]

中学生について、「二極化」が進んでいて、マット運動が嫌いな子どもがいるが、セーフティマットだと飛び込んでいく等、本来、運動は好きだと思う。

スポーツの機会について、中学校の生徒が減っており、教師も減っている。部活動の廃止も出てきており、子どもが多様なスポーツにふれる機会が減っている。子どもが何をしたいのか、また、それを提供する場ができるのか考えていかなければならない。

[副委員長]

「彦根のまちの人は冷たい」との指摘があったが、スポーツは人と人のつながりを持てるものである。震災復興にもスポーツが活用されており、まちづくりともつながっている。スポーツで絆づくりを進めたい。

子どもと高齢者がつながったスポーツの機会、子育て世代でも親子一緒にスポーツをする機会や仕組みができればよい。

指導者についても、高校生が子どもを教えることも考えられる。このような仕組みができれば、課題が克服できる。

障害者スポーツについて、障害者スポーツ団体の人が言っていたこととして、究極の目標は同じ運動会で同じ競技がしたい、それが本当のつながりだ、と言っていた。そんな機会があれば、彦根市民はみんなつながっている、ということになるのでは。

[委員長]

計画骨子について、意見をもらった。それぞれの内容は意義や価値がある。事務局で骨子への反映を検討し、次回に案を提示してもらいたい。

他に重点的に取り組むべき施策があれば、事務局に意見を出してもらいたい。

### (3) その他

[事務局]

第3回策定委員会については、12月から1月の開催を想定しており、改めてスケジュールを確認したい。また、必要な資料等あれば連絡してもらいたい。